

▶知っています?市の森林皆伐で市民の財産が失っていること。

白旗山都市環境林ニュース

2024年9月30日(月) NO.5 発行:札幌の自然を守る会 代表梶田清尚 HP:<https://midori.kei1.org>

森林皆伐は誤った取組だ



「白旗山」皆伐・再造林はCO2を放出、地球温暖化をより進める ～根拠のない市のゼロカーボン政策、完全な間違いだ～

今回は本紙ニュースNO.4からの続きになりますが、その号では「(1)基礎となる林況データと分析の範囲・領域」において、「白旗山都市環境林」のこれまでの森づくりを前提としたケースを取り上げ、現地での皆伐・再造林は裸地からの新植スタートを問うところです。これまで森林が70年かけて林木や土壤に蓄えた炭素ストックを消失することは、CO₂排出の出発点と思われますので、もしそうであるならば準備作業から始まる一連の伐採のCO₂排出からカウントすることになります。

皆伐でCO2は50年以内大拡散

ここでは、林学者(東京大学名誉教授)の大熊幹章氏がスギ人工林の植栽から育林、木材利用、廃棄、消失までのCO₂の収支と累計を100年に亘り炭素量換算していますので、そのデータを参考に話を進めます。仮に林齢50年で皆伐した林分を70年で伐採したならば、炭素ストックは増加しているはずで、その失われる炭素も多くなります。もちろんここでは植栽に伴う育苗から、地拵え、下刈り、間伐など

育林にかかる排出や利用間伐などの蓄積要因も加えることになりますが、いくら長い年月

ゼロカーボンシティ宣言
[LEED for Cities and Communities] ^{※2}
プラチナ認証取得

市民1人当たりの温室効果ガス排出量や生活用水使用量が少ない点が高評価を受けたことなどにより、国内の都市で初めて、最高ランクの「プラチナ」認証を取得しました。



※2 国際的に最も認知されている環境性能評価システム「LEED (Leadership in Energy and Environmental Design)」のカテゴリーの一つ

参考1

札幌市ゼロカーボンシティ宣言

本会が指摘／森林の皆伐・再造林はCO₂増加に

2020年2月26日、令和2年第1回定例会の代表質問において、2050年には札幌市内から排出される温室効果ガス排出量を実質ゼロにすることを目指すこととし、市民や事業者と一体となって、脱炭素社会の実現に取り組んでいく考えを表明し、国内で72番目にゼロカーボンシティを宣言した自治体となりました。

札幌市においては、このゼロカーボンシティの実現に向け、2021年3月に策定した「札幌市気候変動対策行動計画」に基づき、気候変動対策に取り組んでいきます。

■「森林の保全及び整備」関係

手入れ等がされていない森林についてはCO₂吸収量が低下することから、間伐により樹木の生長を促すほか、下草刈りや植樹・育樹などの森づくりを促進しています。

■「道産木材等の活用」関係

道産木材を資源やエネルギーとして活用することで、資源の循環利用やCO₂排出量の削減、地域内の経済循環などにつなげる取組を推進しています。

市内の森林(白旗山)の間伐材を主原料としたタンブラーを製造し、市民の皆様へ配布するなど、道産材の普及に向けた取組を行っています。



をかけた木材でも1000年もつ建築材の使用ならともかく、伐採したら木材による炭素の閉じ込めは、せいぜい50年と思われます。

したがって、皆伐してしまうと高蓄積の炭素であってもCO₂となって、伐採後林地の根など地下部のバイオマスや土壤有機物及び残存枝葉とともに、ほぼ確実に50年以内に大気中に拡散されてしまいます。

根拠のないカーボンニュートラル

これに対し日本政府をはじめとした国際機関は、「このCO₂を50年かけて造林木が吸収するからプラス・マイナス・ゼロになる。これがカーボンニュートラルだ。しかも炭素が燃やされる時のエネルギーが化石燃料の代替になる。だから、大いに皆伐・再造林を進め、ゼロカーボンの実現が可能なるのだ」と、誤った考え方でゼロカーボンの取り組みにお墨付きを与えています(参考2)。そして「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」において皆伐・再造林を繰り返す度に吸収・貯蔵される炭素が増え、CO₂の削減が実現されるとまで説明しています。

それは伐採から10年後、一時、炭素の貯蔵量の落ち込みがみられるものの伐採直前よりは下回らず、一定の木材蓄積とその使われ方が影響するとはいえ、先駆的な命題として「皆伐そのものが、長短の時間的制約を超えてCO₂の削減をもたらす」と推定しています。したがってこの説は、大熊氏の科学的な論理によるというより願望に近いイメージを表したものでしょう。しかし、これが、今や日本の森林・林業行政の中核的政策として席卷しているのは紛れもない事実なのです。

「ゼロカーボン」は間違い本会が検証

この皆伐・再造林を「白旗山都市環境林」の71年生カラマツ林に適用した場合、果たして本当にそうなるのか、本会が検証してみました。分析に当たっては、環境省をはじめ各省庁が統一的に設定したものを用い、炭素(C)もしくは二酸化炭素(CO₂)の吸収、貯蔵、排出の算定式及び媒介変数によって行いました。

なお、算定式など結論に至るまでの過程は、本会において論文としてまとめていますので、本紙では割愛いたします。

まとめの結論としては、札幌市が森林を皆伐してまで進めている「ゼロカーボン政策」は完全な間違いであることがわかりました。

参考2

札幌市ゼロカーボンシティの目標

■2030年目標: 温室効果ガス排出量を2016年比で55%削減(2013年比で59%削減)

市内では2020年の1年間で1千万トンを超える温室効果ガスが排出されました。これは道内の森林の整備などにより1年間で吸収する量の1.2倍以上に相当します。

2012年をピークに徐々に減少していますが、目標の達成には、エネルギーの有効利用と再生可能エネルギーへの転換を進め、これまで以上に削減ペースを上げることが必要です。

■ゼロカーボンとは

実質ゼロとは、「温室効果ガス」を排出する量と、樹林などにより吸収する量を同じにすることです。

札幌市が実行した「皆伐・再造林」は、カーボンニュートラルにはならず「ゼロカーボンの実現」(参考1)どころか、二酸化炭素(CO₂)を放出するといった真逆なことが進められ、むしろ地球温暖化を促進する犯罪的な行為となっています。すでに市民の大好きな森林財産が破壊されていますが、いまからでも白旗山都市環境林の「皆伐・再造林」工事を中止して、これまで森林を破壊したところの復元を一刻も早く行うことを求めます。

※ ※ ※

次号では、「白旗山都市環境林」の森づくりはどうあるべきか、従来の白旗山の森づくりと「皆伐・再造林」との違いを取り上げます。市が進めている森林皆伐などは時流に逆行したもので、やってはならないことを税金を使い進めているのです。CO₂は、森林に閉じ込めておくべきものであって、温室効果ガスによる気象変動の最も有効な安全保障といえるのです。

追記

►8月31日午後、札幌市資料館で白旗山都市環境林を語る会を開きました。本会は白旗山の森林が大量に切られていることを昨年くれ、現地で確認しました。市民の財産を札幌市は半ば勝手に切り、森の本来の機能を著しく破壊しています。この現実を世に伝え、共に白旗山のあり方を話し合ったところです。多くの意見が出され、今後もこの札幌市の森林行政のあり方をただしていく積もりです。

